

日本文学部会

【概要】

野 口 美 渚*

2024年11月2日、第19回国際日本学コンソーシアム日本文学部会が開催された。本年度のテーマは「見る／隠す」である。大学院生1名と協定校の教員1名の研究発表が行われた。以下、登壇順に各発表の内容と質疑応答の概要を報告する。

1. 陳嘉謙（台湾大学 院生）

「『今とりかへばや』の美的語彙から見る作者の認知—王朝物語における使い分けを踏まえて—」

陳氏はまず、『今とりかへばや』の研究が、取り換えられた姉弟の内の女君を中心として従来進められてきたことに触れ、近年の研究では男君に焦点を当てたものも一部見受けられることを指摘した。その上で陳氏は、『源氏物語』など他の王朝物語において、男性に女性的美を見出す伝統があったことを論じる先行研究に着目し、美に関する語彙の使い分けを分析した。「なまめかし」は『源氏物語』など先行王朝物語では女性主人公より男性主人公に多用されていたことや、「なまめかし」と対立する語「ををし」が『今とりかへばや』の女君に用いられ女君の内面の特徴を描写していることを指摘した。『今とりかへばや』は美的語彙の使い分けによって姉弟の内面の差異を描写した、人物の内面に寄り添った作品であると結論付けた。質疑では「なまめかし」が容貌と内面双方を修飾しうることについて質問がなされた。

2. 曹景惠（台湾大学 教員）

「中世文学における『老子』の引用」

曹氏は、『老子』が複数の中世文学に引用されていることを取り上げた。『老子』は発掘資料などから7世紀後半～8世紀にかけ既に日本で流布していたことが分かっている。伝存する最古写本は『老子河上公注』であり、現存古写本はほとんどがこれを底本とする。中世文学の『徒然草』『沙石集』『雑談集』『十訓抄』なども『老子河上公注』からの引用が窺える。『十訓抄』は『老子』の引用として『荀子』『淮南子』の言なども載せるが、これはおそらく類書『明文抄』に拠ったという指摘がなされた。また取り上げた作品中で『徒然草』以外の作品は『老子』の書名を明記して引用するが、『徒然草』は書名を隠して引用している。これは啓蒙書・教訓書の性格を持つか持たないかということに関わるのではないかという考察が加えられた。質疑では兼好があえて書名を隠した狙いについて質問が出された。

以上の通り、本年度の日本文学部会では、表面の容貌に隠された内面の描写に焦点を当てた研究、引用において何から引用したのかを明示するもの、隠すものの差を考察した研究が発表され、大会テーマの「見る／隠す」を踏まえた成果が上げられた。また『今とりかへばや』の研究は現代社会にも通ずるジェンダー規範に関する問題意識を下敷きにしており、今後の研究の枠組みを考える上でも大いに寄与するものであったと思う。

*お茶の水女子大学・院生